『伊勢物語』六十三段と仏教思想

――『万葉集』「みやびを」問答の受容と『うつほ物語』一条北の方物語への影響を通して――

内藤英子

はじめに

『伊勢物語』六十三段（以下、六十三段）に登場する「世ごころづける女」は、「つくも髪」の好色な女（以下、「つくも髪」の女）で、その切実な思いに「心なさけあらむ男」（後に「在五中将」と登場）が応じたという特異な内容を持つ段である。

本稿では、まず、六十三段に用いられた「世ごころ」と「心なさけ」の意味を、その漢語である「世心」と「心情」の意味と比較することで再検討したい。次に、六十三段の背景には『万葉集』巻二の石川女郎と大伴田主の「みやびを」問答があることを、「方便」と「恥」に着目して考察する。その際「みやびを」問答が『藝文類聚』にある「登徒子好色賦」や「美人賦」とともに、『遊仙窟』の影響のもとに創作されていることをふまえる。さらに、「みやびを」問答が六十三段だけでなく、『うつほ物語』忠こその巻の一条北の方物語[1]の背景にもあることを明らかにし、「なさけ」と「恥」の関係について考察したい。これらの考察をふまえて、六十三段の「けじめみせぬ心」を持つ男と『うつほ物語』の橘千蔭が、物語内でどのような人物として設定されているかを、『伊勢物語』と仏教思想、特に『法華経』との影響関係をもとにして明らかにし、新たな六十三段の読みを提示していきたい。

一　『伊勢物語』六十三段の「世ごころ」と「心なさけ」

まず、六十三段の本文をみる。

昔、ⓐ世ごころづける女、いかでⓑ心なさけあらむ男に、あひ得てしがなと思へど、言ひ出でむも頼りなさに、まことならぬ夢語りをす。子三人を呼びて語りけり。二人の子は、なさけなくいらへてやみぬ。三郎なりける子なむ、「よき御男ぞいで来む」とあはするに、この女、けしきいとよし。こと人はいとなさけなし、いかでこの在五中将にあはせてしがなと思ふ心あり。狩し歩きけるに行きあひて、道にて馬の口を取りて、「かうかうなむ思ふ」と言ひければ、あはれがりて、来て寝にけり。さて後、男見えざりければ、女、男の家に行きて、垣間見けるを、男、ほのかに見て、

ももとせにひとせたらぬつくも髪我を恋ふらし面影に見ゆ

とて、いで立つけしきを見て、うばら、からたちにかかりて、家に来てうち臥せり。男、かの女のせしやうに、忍びて立てりて見れば、女嘆きて寝とて、

さむしろに衣片敷き今宵もや恋しき人にあはでのみ寝む

とよみけるを、男、あはれと思ひて、その夜は寝にけり。世の中の例として、思ふをば思ひ、思はぬをば思はぬものを、この人は、ⓒ思ふをも、思はぬをも、けぢめ見せぬ心なむありける。

六十三段の特徴として、冒頭が「昔、男ありけり。」で始まっていないこと、在原業平個人と特定できる「在五中将」という呼称で登場し、最後に男についての批評があることがあげられ、業平は、卓越した、博愛主義的な色好みの男性として描かれている(2)。また、「既成章段が描き出した主人公、すなわち在原業平の人物像に一方で強く寄りかかりながら、他方では、極端に非現実的な虚構の世界を新しく描き出して」(3)いるともされ、第三次段階の成立ではないかと推定されている(4)。漢詩文の影響について古注より指摘はされているが、直接的な引用と考えられるものは見出されていない。

この六十三段には次の八つのモチーフがある(5)。

A　「世ごころづける女」、つまり好色で、しかも「つくも髪」の女が登場すること。

B　Aの女に「心なさけあらむ男」である「在五中将」が「あふ」こと。

C　Aの女が「まことならぬ夢語り」をしたこと。

D　三人の息子のうち末子が母の喜ぶ発言と行動をして親孝行したこと。

E　垣間見が女と男で前後二回繰り返されたこと。

F　女が「うばら、からたちにかかりて」走るようにして家に帰ったこと。

G　女の「さむしろに衣かたしき」の歌が『古今集』にある宇治の橋姫の歌の下の句を作りかえた歌であること。

H　男が「けぢめ見せぬ心」を持っていたことへの批評。

この中のABHを中心に検討していきたい。それぞれに本文のⓐ「世ごころづける女」ⓑ「心なさけあらむ男」ⓒ「思ふをも、思はぬをも、けぢめ見せぬ心」と「心」が含まれている。『伊勢物語』には、「心」を含む言葉が八十三例あり、心のあり方が描かれた作品と言える。また、『古今和歌集』の仮名序には「在原業平は、その心あまりて、ことばたらず」とあり、業平の和歌にはおさまりきれないあふれる思いがあるとされている。

まず、冒頭で対比されているⓐの「世ごころ」とⓑの「心なさけ」の意味を再検討したい。ⓒについては、後ほど考察する。ⓐの「世ごころ」は、『伊勢物語』写本の表記としては、「世ごころ」「世心」「よごころ」の三種類がある(6)。漢語「世心（セイシン）」と区別するため、本稿では統一して「世ごころ」と表記する。「世ごころ」の用例は、『伊勢物語』に一例しかない語である。この「世ごころ」については森野宗明氏の説明に従いたい(7)。

「世ごころ」は、通説、「世」を男女の仲の意と規定し、異性に対する関心、色心、好色心とする。用例にとぼしいことばで帰納的に語義を確定しがたいが、あるいは、普通ならとうにそういう煩悩からは解放されていてしかるべきほどの年齢なのに、依然として、人並みの女の人が持っているような心、つまり場面的には、異性への関心がそのまま染みついている女……の意であって、「世ごころ」じたいは、人並みの誰もが持っているような心の意か。また、「世ごころづける」と、「世ごころづく」と動詞とみる読み方もあるが、「世ごころ・つく」と二語として扱ってよい。「つける」の「る」は完了。そのままいまだに染みついているという存続の気持ちをくみとりたい。

「世ごころ」の意味は本来「人並みの誰もが持っているような心」とし、それを「煩悩」ととらえている点に注目したい。その「煩悩」は、六十三段では「異性に対する関心」や「淫欲」と考えられ、仏教の五戒の一つである「不邪淫」の「淫」につながる。

次に、ⓑの「心なさけ」は、『伊勢物語』写本の表記としては、塗籠本が「心」を「この」とする以外は「心なさけ」と表記されてい

るが、「こころなさけ」と読み、「心なさけ」で一語と考えたい。「心なさけ」の用例は、他に次の一例があるだけである。

ひたぶるに思ひたえてもあるべきはあなむつかしの心なさけや

（長承三（一一三四）年・中宮亮顕輔歌合、藤原為貞）

まず、「心なさけ」の一部である「なさけ」の意味を明確にしたい。「なさけ」の語は、『時代別国語大辞典』[上代編]になく、平安時代からみられる言葉である。「なさけ」の最も語源的に古い意味は、「いやな相手に対しても、つとめて、形だけでもつくって示す態度」つまり「愛情のそぶり」で、「相手への思いやり」[8]とされる。また、「なさけ」は王朝文化を「みやび」に向かって形成する重要な「心的因子」とする指摘もあり、「思ひやり」ある態度や心だけでなく、それによって見出され、生み出されてくる自然や事物のあり方までをさしている[9]。すなわち、「なさけ」は「自然に向けられれば、風雅、風流な心、人間に向けられれば、思いやり、情愛」[10]という意味になる。

『伊勢物語』には、「なさけ」が四例あり、そのうち三例がこの六十三段で、あと一例は一〇一段にある。業平の兄である在原行平が「なさけある人にて、瓶に花をさせり」とあり、この「なさけ」は「情趣、風流」の意味である。六三段では、ⓐ「世ごころづける女」が求めていたのが、ⓑ「心なさけあらむ男」で、母である女の息子三人の内、兄二人は母の「まことならぬ夢語り」に「なさけなく」答え、「三郎なりける子」だけが、「在五中将」でなければ「いとなさけなし」と思ったという三例がある。この六十三段は、「心」のあり方として、特に「なさけ」がどのようなものであるかが主題になっている。

さらに、「世ごころ」と「心なさけ」が、いずれも漢字をあてると、『漢語第詞典』に「世心」、「心情」と立項されている漢語であることに着目して、二つの語の意味を検討したい。写本の表記で「世心」はあるが、「心なさけ」の「なさけ」に「情」をあてたものはない。また『新撰字鏡』（昌泰年間（八九八～九〇一年）成立）には「情」に「こころ」の訓だけがあり、「情」を「なさけ」と読む例は『源氏物語』の蜻蛉巻が初出である[11]。本稿では、昌泰年間から『源氏物語』成立までの間に、「情」を「なさけ」と読むことが定着したと推測して考察を進めたい。特に六十三段は第三次成立でこの期間内に成立した可能性が高い。漢語「世心」「心情」の漢詩文と仏典での用例を次にあげる[12]。

①『藝文類聚』巻七十六「内典上」「内典」宋謝荘「霊空詩」
物情異所異、世心同所同、状如薪遇火、亦似草行風。

②『雑阿含経』巻五十（宋天竺三蔵求那跋陀羅訳）
調伏楽世心　常楽心解脱　当捨不楽心　執受安楽住

③『白氏文集』巻五「答元八宗簡同遊曲江後明日見贈」白居易
行到曲江頭、反照草樹明。南山好顔色、病客有心情。

④『賢愚経』巻九・本縁部
時有一女。端政殊妙。世間希有。王甚愛重。不違其意。時女辞王。出遊園観。王便聴去。女至園中。見於太子迦良那伽梨。頭乱面垢。目無所見。著弊壊衣。坐林樹間。其女観察。覩其色状。心情属向。不離其側。便坐其辺。与共談語。

①②ともに「世心」は「世の人の心」を意味し、『伊勢物語』をその意味で理解することも可能である。①の「内典」は仏教の典籍を意味し、傍線部は「物の情（こころ）異なる所は異なり、世の心同じき所は同じくす」と読み、「物情」も「世心」とほぼ同様の意味で、仏教では「物」（木草山川鳥獣魚虫）にも「情」が有るとされる。②の傍線部は「調伏して世心を楽にす」と読み、『雑阿含経』は原始仏教経典である。「世心」は、仏教語として特別な意味は認められないが、仏典類に数多くみられる表現である[13]。③の「心情」は、「興趣やそれを感ずる人間本来の情緒心境」[14]を意味している。この詩では

「病客有心情」は、「病み上がりの身にはひとしお興趣を感じ、しみじみとした心境になった」という意味になる。この「心情」の語は、『全唐詩』の中で五十七例の用例があるが、白居易が二十九例、その友人の元稹が六例（その内三例が白居易との贈答）で白居易文化圏で好んで用いられた語と言える。特に、「興趣を感じる心境」の意味であることに注目したい。④の『賢愚経』は、中国で四四五年に編集されたもので、説話を通して仏教の根本的な教義が語られている。傍線部「心情属向」の「属向」は、気持ちがそちらに向くという意味である。王の愛を受ける女性が太子に心惹かれることを意味しており、女性が男性に心惹かれる説話である点を六十三段との関連で注目したい。「心情」も、特に仏教語として特別な意味は認められないが、白居易は仏教に深く帰依していたので、仏典によくみられる言葉を意識的に自らの漢詩文に用いていた可能性はある。

このように、漢語「世心」と「心情」は、本来は漢詩文、特に仏典に由来する語であったが、『伊勢物語』は、それぞれの漢語を、和語化して「世ごころ」「心なさけ」として用いているのではないだろうか。「世ごころ」の本来の意味は「世の人の心」ともっと広い意味でとるべきで、仏典での用例が多いことからも、仏教的な「煩悩」の意味も含まれていると考えられる。また、「心なさけ」も同様に、もとは仏典に由来する語で、意味的には白居易が③で用いたように、「興趣を感じる心境」の意味も含まれ、風流や「みやび」といった言葉に通じている。

二　六十三段と『万葉集』の「みやびを」問答―「方便」と「恥」

この節では、六十三段には、『万葉集』巻二の石川女郎と大伴田主とに交わされた歌の贈答「みやびを」問答が背景にある[15]ことについて、「方便」と「恥」という言葉に着目して考察したい。

126　石川女郎、大伴宿禰田主に贈る歌一首

遊士（みやびを）と我は聞けるを屋戸貸さず我を帰せりおその風流士（みやびを）

大伴田主、字を仲郎といふ。ⓐ容姿佳艶、風流秀絶、見る人聞く者、嘆息せずといふことなし。時に、石川女郎といふ人あり。ⓑ自（もとよ）り双栖（おもひ）の感をなし、恒に独守の難きことを悲しぶ。ⓒ意（こころ）に書を寄せむと欲（おも）へど、良信に逢はず。ⓓここに方便を作して、賤しき嫗に似す。おのれ堝子（なべ）を提（さ）げて、寝側に至る。ⓔ哽音蹢足し、戸を叩きて諮（とぶら）ひて曰く、「ⓕ東隣の貧女、火を取らむとして来る」といふ。ここに仲郎、暗き裏に冒隠の形を知らず、慮の外に拘接の計（たぼかり）に堪（あ）へず。思ひのまにまに火を取り、跡に就きて帰り去らしむ。明けて後に、ⓖ女郎、既に自媒の愧づべきことを恥ぢ、復心契の果らざることを恨む。因りて、この歌を作りて謔戯を贈る。

127　大伴宿禰田主の報（こた）へ贈る歌一首

遊士（みやびを）に我はありけり屋戸貸さず帰しし我そ風流士（みやびを）にはある

石川女郎（以下、女郎）は、容姿が麗しく風流に秀でた大伴田主（以下、田主）と逢瀬の機会を持ちたいと思い、恋文を届けようとは思うが良いつてがない。そこで「方便」すなわち一計を案じ、東隣のみすぼらしい老婆に変装し、自ら鍋を提げて、老婆の声色を使い、足をふらつかせて、火を乞うために田主の寝所を訪ねる。田主は女郎の変装に気付かず、乞われるままに火を与え、そのまま女郎を帰してしまった。女郎は、仲人なしに厚かましく押しかけていったことがきまり悪く、また思いの果たせなかったことを恨みに思い、田主の無粋をなじる歌を戯れごととして贈る。女郎は、「みやびを」を恋愛の機微に通じた男、色好みの意味で用いており、田主は「みやびを」と聞いていたのに自分を泊めもしないで間抜けな「みやびを」だと詠んでいる。一方の田主は、「みやびを」を女性の誘惑を退ける道徳的な男として用いて、女郎に宿を貸さずに帰した自分こそ真の「みやびを」で

あったと詠んでいる。

「みやびを」問答で問題となっている「みやびを」は、『万葉集』では二つの漢字があてられている。「遊士」と「風流士」で、「遊士」は「風流を求めて遊ぶ男子」の意味である。「風流士」は漢籍に例があるが、中国でも時代によって変遷があり、「個人の道徳的な風格」と「官能的な退廃性を帯びたなまめかしさ」の意味がある[16]。田主は前者の解釈をとり、田主にとって「風流」とは俗につかず高邁な生き方を貫くことであった。「我はありけり」の「けり」は詠嘆的な用法で、自媒女を撃退した自分こそ「みやびをであった」と再確認した気持ちを表している。一方の女郎は後者の延長ともいうべき好色的な意味に解釈し、この意味は『遊仙窟』など唐代小説類に多い意味である。

この「みやびを」問答の左注の記事は宋玉の「登徒子好色賦」（『文選』巻十九）や司馬相如「美人賦」などの賦から暗示を得て作った思われる虚構性の強い内容である。さらに、宋玉の「登徒子好色賦」と司馬相如「美人賦」は、この順で『藝文類聚』巻十八・人部二「美婦人」に掲載されている。この二つの賦のある『藝文類聚』は、奈良時代の官人の必読書であった[17]。『藝文類聚』人部二の項目は「美婦人」「賢夫人」「老」の順で続いていく。特に関連性のある宋玉「登徒子好色賦」（以下「好色賦」）をみたい。

登徒子侍於楚王。短宋玉曰「ⓐ玉為人体貌閑麗、口多微辞、又性好色、願王勿与出入後宮。」王以登徒子之言問宋玉。玉曰「天下之佳人、莫若臣ⓕ東家子、増之一分則太長、減之一分則太短、著粉太白、施朱太赤、眉如翠羽、肌如白雪、腰如束素、歯如含貝、嫣然一笑、惑陽城、迷下蔡、然此女登牆闚臣三年、至今未許也。登徒子則不然、ⓔ其妻蓬頭攣耳、齞脣歯、旁行踽偻、又疥且痔、登徒子悦之、使有五子、王熟察之、誰為好色者矣。」（後略）

宋玉を形容するⓐの「体貌閑麗」は、『日本三代実録』で在原業平の形容に使用されている。この賦で、宋玉は自分が好色ではないことを楚王に訴えている。宋玉は、東隣に住む美しい娘が家の垣根に登って私の様子をうかがい三年になるが、まだその思いに答えていないことで自分は好色でないとする。さらに登徒子の妻が、髪が乱れ、耳はつぶれ、唇は薄く、歯は欠け、足はふらつき、背は曲がっていて、疥癬の上に痔であることを述べ、そのような妻を愛し、五人の子を作る登徒子の方が好色であると反論している。

「好色賦」と「みやびを」問答は、男がⓐのように美男子であること、女がⓕの東隣に住む女性であることが共通し、登徒子の妻の様子ⓔが老女に変装した女郎の表現に用いられている。だが、「みやびを」問答にあるⓓの「方便を作して」やⓖの「自媒の愧づべきことを恥ぢ」の部分は、「好色賦」にはない。

この「方便」と「自媒を愧づ」に関わる言葉は、『藝文類聚』とともに奈良時代の官人によく読まれた『遊仙窟』の中にある。十娘、張郎、五嫂の三人が古人の詩を歌う場面で、五嫂が『詩経』斉風「南山」の詩の一部を引いて「妻を娶ること之を如何、媒に匪ざれば得ず。」と歌い、自らが十娘、張郎の「媒」（仲人）になることを言う。傍線部は、「妻を娶るにはどうしたらよいだろうか、仲人がいなければ娶ることはできない」の意味で、もとの「南山」の詩にはこの前に、妻を娶るには「必ず父母に告ぐ」という言葉もあり、父母の許可や仲人がいなければ、結婚は成立しないことが歌われている。『詩経』ではそうした手続きを経ない恋愛が批判されている。

十娘の部屋に通された張郎は、十娘がなかなか姿をみせない理由を五嫂に尋ねる。五嫂は、「女人は自ら嫁がんことを羞づ。方便もて渠（きみ）が招かんことを待つならん。」と、女性は自分の方から進んで嫁に行

くことを恥ずかしがるものと、張郎に説明し、ここでの「方便」は、「特に、わざと」または「婉曲に、遠回しに」の意で、自ら来ることはせず、わざと（遠回しに）張郎に招かれるのを待っているとする。「方便」は、本来仏教語で、仏菩薩が一切衆生つまり人びとを導くのに、それぞれの素質に応じてさまざまな手立てを用いる、そうした巧みな手段のことを「方便」と言い、語源的には「近くに行く」という意味である[18]。また、仏典では『法華経』の「方便品」、「如来寿量品」などにみられる。

このように、「自ら嫁がんこと」や「媒」がなく結婚を申し込むことは、中国では恥ずべきこととされ、「みやびを」問答でも、「媒」もなく、自らが変装して「媒」となり男性との逢瀬を実現しようとした点に、漢詩文にみられる愧ずべき「自媒」を認め女郎は恥ぢている。「愧」と「恥」の二度、恥じる思いが記されていることに注意したい。

この「みやびを」問答をもとに、さらに六十三段を考察する。六十三段も女性から男性を誘う構図となっている。「つくも髪」の女は、三人の子を前にして直接的には男性との逢瀬を望む気持ちを言えず、「まことならぬ夢語り」をする。表面的には「恥」は描かれていないが、ここに女の恥じらいを読みとることができる。「つくも髪」は、男の歌に詠まれた言葉で、年老いた女性の白髪を意味する。一度は三郎のおかげで、逢瀬は実現したが、二度目は、女自ら男の家に行く。これが女郎の「方便」である老女の変装による「自媒」に相当し、女郎は「恥」の意識を感じているが、「つくも髪」の女の「恥」の意識は描かれていない。

「みやびを」問答では、田主は老女の変装をした女郎をそのまま帰したが[19]、六十三段の「在五中将」は「つくも髪」の女に応じ、もとの話はずらされている。六十三段で強調されているのは、前述したように、男の「なさけ」である。女郎の思いに答えられなかった田主が「おそのみやびを」であれば、六十三段の「在五中将」は「みやびを」ということになる。この「みやびを」には「風流士」の漢字があてられ、「みやび」は風流ととらえられている。『伊勢物語』初段で、昔男は「いちはやきみやび」をしたと語られているが、昔男が姉妹を垣間見する場面には『遊仙窟』の影響が指摘されている。『遊仙窟』にも、「風流」を「みやび」ととらえる用例がある[20]。その「みやび」の実現のためには、「なさけ」ある「在五中将」が必要であった。さらに、六十三段で「在五中将」は、一度目は三郎の親孝行な心に「あはれがり」て女のもとに来て寝、二度目は「つくも髪」の女の歌に「あはれ」を感じて寝た。そのような「あはれ」を感じることが「なさけ」とも言え、「みやび」にも通じる。六十三段での「なさけ」は「みやび」に通じる行為で、女性の「恥」の意識には関わらない。

三　「一条北の方物語」と「みやびを」問答―「恥を捨つ」

この節では、『伊勢物語』六十三段と『万葉集』の「みやびを」問答が、『うつほ物語』忠こその巻の「一条北の方物語」に引用されていることを明らかにしたい[21]。まず、忠こその巻の冒頭で、夫である左大臣を亡くした一条北の方が、同じ時期に北の方を亡くした橘千蔭との結婚を望んで歌を贈る場面をみる。

殿の内勢ひて経たまふに、かく男の妻失ひてものしたまふと聞きて、北の方、①このおとどに御心つきて思せど、よきをだに聞き過ぐしたまひて、まして思しもかけず。

女君は、かく思ひて、②山々寺々に修法行ひ、仏神に大願を立てたまへど、しるしなし。北の方、③おほかたは神仏にも申さじ。この人に「われかく思ふ」と言はむ。われ人のかしづく娘にもあらず、妻にもあらず。さらばこそまばゆくもあらめ。④これを放ちて、妻なき人のよろしきはいづこにかあらむ。⑤恥を捨て

て言ひ出でむと思して、かのおとどの御乳主の娘、あやきとて、⑥めでたくかたちある童を使ひたまふ、それにありがたき装束をせさせて、かく聞こえて奉りたまふ。

「ここのみや浅茅繁きと思へどもまた葎生ほす宿もありとか同じくは、同じ野にや思し召したまはぬ」とて、をかしき浅茅に御文さしたり。さて奉れたまふ。（二一二・二一三頁）

千蔭も妻を亡くしたと聞き、一条北の方は千蔭に関心を持つが、千蔭はよい女との再婚話でさえ聞き流してきたので、未亡人の一条北の方などは全く思いもかけない。再婚話に見向きもしないのは、我が子忠こそへの継母のいじめを懸念する北の方の遺言に従っているからである。ここでは、まだ一条北の方の年齢などは一切記されず、「北の方」から「女君」と呼称が一度変更されている。一条北の方は、両親の一人娘でその遺産をすべて相続した比類のない財宝の持ち主で、莫大な費用をかけて、多くの寺々に修法を依頼し、千蔭との恋が成就する大願を立てるが効果がない。両親が死んで娘として親の意向に従う必要もなく、夫も死んで寡婦の身、「恥を捨てて」一条北の方から千蔭に自分の思いを歌と手紙で伝えようとする。だが、元左大臣の妻という身分の高い一条北の方は、自らは行かず、亡き夫の乳母子ですぐれた容貌の女童であるあやきに、豪華な衣装を着せて千蔭の家に行かせる。ここで、「みやびを」問答の左注の一部を再掲する。

大伴田主、字を仲郎といふ。ⓐ容姿佳艶、風流秀絶、見る人聞く者、嘆息せずといふことなし。時に、石川女郎といふ人あり。ⓑ自り双栖の感をなし、恒に独守の難きことを悲しぶ。ⓒ意に書を寄せむと欲へど、良信に逢はず。ⓓここに方便を作して、賤しき嫗に似す。（中略）。明けて後に、ⓖ女郎、既に自媒の愧づべきことを恥ぢ、復心契の果らざることを恨む。

田主を形容するⓐが、妻がなく独り身の千蔭のような人物はなかなかいないことを述べた④の部分に、女郎の田主への思いが描かれたⓑの部分が、①で一条北の方が千蔭に「御心つきて」つまり関心をもった所に相当する。「心つく」という言葉が用いられ、六十三段の「世ごころづける」女と同じ様な表現が用いられている。ⓒの手紙を送るつてがない部分は、②と③の神仏に願ったが効果はなく、神頼みはやめて、自らが思いを告げることを決意する部分に相当する。ⓓで女郎は「方便」すなわち一時しのぎの便宜的な手段として、みすぼらしい老婆に変装して田主に近づくが、⑥で一条北の方は、自らは赴かず、豪華な衣装を着せた美しい童を遣わし、「みすぼらしい老婆」の女郎とは正反対の「方便」を用いる。一条北の方は、神仏への祈りの効果がないため、経済力を用いて千蔭に手紙を届けさせたのである。女郎はⓖで「自媒」を「恥」ぢているが、⑤で一条北の方は「恥を捨てて」言い出そうとし、この「恥」は、ⓖと同じ「自媒」する「恥」と考えられる。

⑤の「恥を捨つ」の意味について、さらに検討したい。『竹取物語』に「鉢を捨つ」と掛けられた「恥を捨つ」の用例があり、「臆面もなく厚かましいこと」という意味である。「恥を捨つ」は『うつほ物語』に三例あるが、⑤以外の用例は「春宮」と「藤英」の二人が主語で男性だが、三例すべて「恥知らずな臆面もない言動」の意味で用いられている[22]。確かに、一条北の方の行動は、未亡人でありながら後述するように親子ほども離れた千蔭に女性から言い寄っており、臆面もなく厚かましい行動であると言える。

石川女郎はⓖにあるように田主への思いが果たされず田主に対して恨みをもったが、次に、前述の場面に続く一条北の方の恋の行方が描かれた場面をみる。

あやき、千蔭の御殿に参りて、門に立てり。殿の人見つけて、「あやしく清らなる童かな」と見て、「いづくよりぞ」と問ふ。あ

やき「左の大殿より」と答ふ。おどろきて御文を取り入れて見たまふ。あやしく、いかに思ほしてのたまふならむ。⑦世の人と思して、一人あればのたまふにやあらむと思ほして、長き葎を折らせて、御返し、

人はいさかれじとぞ思ふ頼め置きて露の消えにし宿の葎は

とて奉りたまふ。

これよりうちはじめて、女はをかしきこともあはれなることも聞こえたまひつつ、「⑧恥見せたまふな」と聞こえたまへば、⑨やむごとなき人のせちにのたまふを、聞き過ぐしてやみなば、なさけなきやうにもあり、人の御恥にもあり。さりとて、昔を忘ればこそあらめ、⑩時々は通ひてまうでむかしと思して、まうで通ひたまふに、男はただ今三十余、女は五十余ばかりなり。よきほどなる親子ばかりなる中にも、⑪千蔭のおとどは、忠こその母君よりほかに、女二人と見たまはず。（二一二三～二一五頁）

あやきは千蔭の従者たちの眼にとまり、一条北の方の和歌は千蔭に届いた。千蔭は、自分には世の中一般の男が持つような女性への興味はないのにと思いつつ、返歌をする。⑦にある「世の人」は、六十三段の「世ごころ」の「世」と同様の意味を表す[23]が、そのような思いは自分にはないと千蔭は強く否定した歌を返す。

この贈答から二人の文のやりとりが始まり、ここから「女」と「男」の呼称に変化している。北の方は興趣や風情ある便りとともに、⑧「自分に恥をかかせるな」と常に千蔭に発言する。⑤で「恥を捨てて」「自媒」を行ったにも関わらず、ここで「恥」を出すのはなぜなのだろうか。⑨で千蔭は、元左大臣の妻という社会的に身分の高い一条北の方が何度も手紙をくれ、切実に言うのを、聞き流してそのままにすると、相手への「なさけ」すなわち思いやりがなく、相手の「恥」になると考えている。この千蔭の「なさけ」は一条北の方の社会的立場に対する思いやりにすぎず、「みやび」なふるまいではない。一条北の方の「恥見せたまふな」という言葉が千蔭に重く響いており、千蔭が一条北の方自身やその歌に「あはれ」を感じたと描かれることはない。ここに「みやび」は存在しないのである。一条北の方と千蔭は、世間に対して「恥」をかくことを恐れており[24]、二人が意識しているのは世間の目であり、一条北の方の千蔭への思いが「恥」になることを懸念している。

「自媒」が中国では恥ずべきものであったことについては先述したが、この「恥」という言葉は、もともとは漢詩文に由来する語である。『孟子』尽心章句上に「仰ぎて天に愧ぢず、俯して人に怍ぢざるは、二楽なり」とあるが、これは「天に対して恥ずべきところがなく、下のほうを見て人々に恥じることがないのが、第二の楽しみである」という意味で、「愧じる」とは、自分の見苦しさを他人や世間に対して、恥ずかしく思うことで、一条北の方の「恥」にもつながる。また、「慚愧」は「恥」を意味する語であるが、仏典に用例の多い言葉である[25]。

耆婆答言「善哉善哉。王雖作罪心生重悔而懐慚愧。大王。諸仏世尊常説是言。有二白法能救衆生。一慚二愧。慚者自不作罪。愧者不教他作。慚者内自羞恥。愧者発露向人。慚者羞人愧者羞天。是名慚愧。」（『涅槃経』巻十九）

『涅槃経』で引用した部分は、父を殺した阿闍世王の問いに対して、耆婆が答える場面である。王は罪を犯したが真剣に反省しているので、諸仏世尊も「慚愧は人を救う」と言い、「慚」とは自分に対して恥じること、「愧」とは他人にたいして恥じることであると説いている。このように、他人の目を気にする「恥」は仏典にも説かれている。

⑩のように、千蔭は時々一条北の方の「恥」をかかせないように通

うようになるが、ここで初めて二人の年齢が明かされる。五十歳あまりの一条北の方が、親子ほどに年齢のちがう三十歳あまりの千蔭に懸想する設定は、六十三段の「つくも髪」の女と共通する。六十三段の「在五中将」は「心なさけ」ある男だった。「みやびを」問答の田主と女郎には年齢が書かれていないが、女郎は「老婆」に変装することから、そのような年齢ではないと考えられる。

四　一条北の方の「恥」と千蔭の「なさけ」

この節では、一条北の方の「恥」と千蔭の「なさけ」の関係についてさらに考察したい。千蔭が公務にかこつけて一条北の方のもとに訪れることはもちろん、手紙さえも送らず数か月がたった場面をみる。

北の方、⑫待ちわづらひ、すべなかりて、かく聞こえたまふ。

「菅原や伏見の里を忘るるはわが荒れまくや惜しまざるらむと聞こゆれば、さらなりや。⑬いみじき恥をも見たまへつるかな」と恨み聞こえたまへれば、おとど見たまふに、⑭いとど心ざし劣る心地したまへど、さてあらむやはとて、返りごと書きたまふ、（中略）おとど、⑮いとほしがりて、かくのたまふを今宵ばかりはまうでむかしと思して、その夜さり、一条にものしたまひて、下りて入りたまふまでは、なほたえたまはじと思す。（中略）⑯人目を思ほして、しばしものしたまふ（中略）この北の方見たてまつりたまふに、⑰病の重る心地したまへど、けしきにも出ださじと思して、（中略）いと苦しう覚えたまへば、何ごとにかことつけて往なましと思すに、北の方、出だしやらじとて、よろづにいひとどめ、⑱御前なる人も、夢語りなどして、聞こえとどむる気色のしるく見えければ、おとど、をかしと思しながら、二、三日ものしたまふ。さて四日といふに、出でたまはむとするに、⑲「物忌みしたまふべき夢を見つ」と聞こえたまへど、「内裏より召しあり」とて急ぎ出でたまひぬ。（二一九～二二一頁）

⑫の「すべなかりて」とは、一条北の方が財も尽き修法もできず、千蔭をこちらに振り向かせる方法がないということだろう。「菅原や」の歌にも千蔭を動かす力はなく、⑬の「いみじき恥」という言葉にのみ、「なさけ」のある千蔭は反応して、⑭ではいっそう愛情が薄れていく感じがするが、⑮にあるように故左大臣の北の方としての相手の世間体を思って気の毒がって出かける。⑯にある「人目」すなわち周囲の女房の見る目を気づかい、⑰では、北の方を見ていると病気が重くなる心地がするが、そのような不快なそぶりは出すまいと心にもない受け答えをして、相手を思いやり一条北の方に恥をかかせないように精一杯努力している。千蔭の思いで強調されるのは、相手への愛情ではなく、とにかく相手に恥をかかせないようにという思いやりである。後に千蔭は「なさけづいた」人と評価されるが、これが千蔭の「なさけ」なのである。早く帰ろうとする千蔭を引きとどめるために、⑱では一条北の方の女房たちが「夢語り」をし、⑲では、一条北の方自身が「千蔭が物忌みをなさらなければならない夢を見た」と嘘を言うが、千蔭を引きとどめることはできなかった。「まことならぬ夢語り」をする点は六十三段と共通している。

この後、長く千蔭が一条殿に通わず、一条北の方が「継母北の方」と呼称された時点から継子いじめが始まる。一条北の方が継子忠こそへの思いを詠んだ歌に対しての返歌にあった「寄る波の」を「寄る年波」と読み誤った後、自尊心の高い一条北の方は「われに恥見すること」と忠こそを恨む。千蔭は一条北の方に「恥」が生じないように努力してきたが、我が子忠こその歌により一条北の方に「恥」が生じてしまい、忠こそに悲劇が待ち受ける。

次の場面は、忠こそが出家した後、千蔭が一条北の方の奸計を知り疎み、互いに手紙を返却する場面である。

かかるままに、一条といふものをよにも聞かじと思ほすに、かの北の方、ものしたまはぬことを思ひいられて、⑳大願を立つ。陰陽師、巫女を召し集めて、せぬわざわざをしたまへど、しるしなし。忠こそを失ひて思ほし嘆くことに劣りたまはず嘆きたまふ（中略）このおとど見たまひて、「あな心憂や。㉑よしとも思はぬに、気色もなくかく恨みたまふかな。ここにこそ忠が上に、よろづにいみじきことをものしたまひけるに、㉒恨み申さまほしく」とのたまひけれど、㉓なさけづいたまへる人にて、「日ごろは、あやしきことのあるに思ひたまへ騒ぎて、内にも参らでなむ籠りはべるに、そこにも参り来ずや」（二四五・二四六頁）

忠こそが出奔した千蔭と同様に、千蔭に通ってもらうために、一条北の方も⑳のように大願を立て、様々な秘法を試みるが効果はなく、千蔭への恨みの歌とともに、今までの千蔭からの手紙をすべて返却する。それを見た千蔭は、㉑㉒にあるようにこちらが一条北の方のことをよいと思っていないのに、臆面もなく恨む相手に対して、忠こそのことでこちらが恨みたいと発言しながら、㉓「なさけづいたまへる人」つまりなさけの深い人なので、相手を恨む言葉は手紙に一切書かない。千蔭が「思ふ」のは、忠こそその母親であった亡き北の方だけで、一条北の方に対しての「思ひ」はなく千蔭にとって「思はぬ」人であった。千蔭は、六十三段にあった「在五中将」を評価した言葉「思ふをも、思はぬをも、けぢめ見せぬ心」で「心なさけ」のある男だったが、亡き北の方の遺言を守らず、自らの「なさけ」により、忠こそその巻はすべての登場人物が悲劇的な結末を迎えることになった。

五　六十三段の「けぢめ見せぬ心」と「慈悲」

千蔭は「なさけづいた」男で、「思ふをも、思はぬをも、けぢめ見せぬ心」で一条北の方に接したが、六十三段の「心なさけあらむ男」も同様である。この「けぢめ見せぬ心」と仏の一切衆生に注ぐ「慈悲」を説く『法華経』との関わりを中心に、六十三段にみられる仏教思想の影響について考えていきたい。

「けぢめ見せぬ心」は「仏教が説く心の「平等」さ、すなわち、執著に基づく分別を示さない無分別の立場を、男女のことに強引にあてはめたもの」という指摘があるが[26]、仏は本来人を「思ふ」「思はぬ」と区別せず往生させる。また、この「思ふをも、思はぬをも、けぢめ見せぬ心」は、「親と非親において、心常に平等にして」（『金光明経』正論品）とほぼ同じ内容で、「親しい人にも親しくない人に対しても心は常に平等である」ことを意味し、仏典に由来する表現と言える。

『伊勢物語』と仏典との関わりについては、「章段の内容自体が仏教に直接関わるものと、必ずしも内容に関わりがなくとも表現に仏教の影響を考え得るものという二つの研究の方向」[27]が指摘されている。後者の表現における仏典受容（歌は「●」、その他には「○」を段数の前に記す）は先行研究をまとめると次のようになる[28]。

●三十一段　「罪もなき」の歌→『法華経』普門品「呪詛諸毒薬、所欲害身者。念彼観音力、還著於本人」のことわり。
●三十九段　「いでていなば」の歌→『法華経』安楽行品「当入涅槃、如煙尽灯滅」
●三十九段　「いとあはれ」の歌→『法華経』方便品「我雖説涅槃、是亦非真滅」
●五十段　「行く水に」の歌→『涅槃経』巻一「猶如電光暴水幻炎、亦如画水。」
●五十八段　「葎生ひて」の歌→『法華経』陀羅尼品「十羅刹女」が女たちを喩える。
●五十八段　「うちわびて」の歌→『法華経』に対しての『涅槃経』を「落穂」と暗示。

○五十九段「面に水そそきなどして」→『法華経』信解品「以冷水灑面、令得醒悟」

●六十六段「難波津」の歌→下句の「これやこの世をうみ渡る舟」は人生が「苦海」であることを暗示し、その語は『大乗理趣六波羅密多経』「在於苦海雖受種種諸苦難事。」にある。また、「この世をうみ渡る舟」から「彼岸に渡る」手立てが連想される。

●六十七段「きのふけふ」の歌→「花の林を憂し」とするのは、『涅槃経』巻一「其林変白猶如白鶴。…如来涅槃相、皆悉悲感愁憂不楽。」によるとする。

●七十七段「山のみな」の歌→『涅槃経』巻一「爾時大地諸山大海。皆悉震動。」

●百二十四段「思ふこと」の歌→『法華経』方便品「世尊重説偈言。止止不須説。我法妙難思」

●百二十四段「思ふこと」の歌→「いはでぞただにやみぬべき」が『過去現在因果経』「仁者何意、黙然不言」により、「ひとしき人」がないは『過去現在因果経』「非但智慧勝一切人其力勇健亦無等者。」による。

○百二十五段「心地」→心が様々なものを生み出すという点で大地に喩えられる仏教語。

●百二十五段「つひにゆく」の歌→「きのふけふとは」が『菩薩処胎経』巻七「昨日見仏、今日已称言滅為聞」による。

主に歌の表現の素材として、仏典が用いられ、十四例中の半数の七例が『法華経』によるものになっている。仏典の用いられ方として、例えば、一二四段の歌「思ふことといはでぞただにやみぬべきわれとひとしき人しなければ」について、仏伝の表現を利用しながら、仏教の世界を志向せず、釈教歌とはまったく異なり、「この歌の作者は、あくまでも心のあり方に関する表現の素材を仏典に求めた」[29]との指摘がある。六十三段においても同様で、「世ごころ」「心なさけ」「けぢめ見せぬ心」と「心のあり方」が問題とされている。

仏典の引用の半数を占める『法華経』は、「仏の一切衆生に注ぐ慈悲について、徹底して述べている」経典で、その中で重要なのは、「方便品」と「如来寿量品」である[30]。「方便品」で釈尊はすべての人間は平等で、差別なく成仏できるとし、その中で「方便」を用いた。前述したが「方便とは、人々を覚りという目的地へと導くための〝最短・最善の方策（手段）〟という意味」である[31]。この「方便品」の解釈について、平安時代の天台宗の祖である最澄は、あらゆる人間が成仏できる一乗の思想にたち、法相宗の僧徳一は、宗教的素質で成仏できる人間を区別する三乗の思想を主張した。この宗教的対立を背景に、六十三段を読むことも可能である。その場合は、六十三段の成立に仏教知識のある人物の関与が考えられ[32]、六十三段の「在五中将」は、一乗的「けぢめ見せぬ心」を持ちながら、女性に対して三乗的「思ふ」「思はぬ」という区別をしていることで「心のあり方」が問題となり、千蔭も同様である。

『うつほ物語』は、特に俊蔭の巻において仏教思想の影響が大きいが、俊蔭は異国の地で仏から「前の世に淫欲の罪はかりなし」と言われ、日本に戻って婿に求められても、「淫欲の罪重き」を理由にして結婚を回避していた。忠こその巻で千蔭は、元北の方に再婚しないように遺言されながらも、一条北の方と交際したことで、忠こそは継子いじめの対象となってしまった。千蔭の罪も、仏教にいう淫欲の罪に相当するのではないだろうか。忠こその巻は俊蔭の巻の陰画となっており、淫欲の罪による結末について、仲忠と忠こその物語におけるその後を考えると、はっきりとした明と暗に分けられる。千蔭は仏の「慈悲」にも似たなさけ深い人間ではあるが、仏性を持つとまでは言

い難く、六十三段の「在五中将」も同様である。忠こその巻の一条北の方物語における千蔭のあり方を考えることで、「在五中将」にも仏教思想の影響を考えることができる。

六十三段に関連して、同じ話型をもつ話が『法華経直談鈔』巻九末（「薬王菩薩事品」第二十三）「老女恋王事」にあることが指摘されている(33)。天文十五年（一五四六）以前に成立したと考えられる『法華経直談鈔』は法華経二十八品の注釈談義書で、難解な経文の内意や語句を解りやすく説くために、譬喩としての説話や和歌を多く引用しており、その中の一つに「老女恋王事」がある。六十三段と比較して、「法華経の読誦の功徳によって老女が若返ったとするのは独特のもの」であるが、「三人の男子を持つ老女がその末子の助力によって狩の帝王と契りを結ぶという展開では全く一致している」。六十三段のモチーフの一つである夢語りは、ここでは老女の述懐に相当している。「貴人への懸想が孝行な息子の援助により奇跡的に成就するという、老女のただならぬ恋愛譚は、大陸においても霊験記に記されるほどの伝承としてあり、我が国では鎌倉期の末葉には寺院での説法の題材にされていた」ようである。六十三段に直接影響関係があるというわけでなく、『法華経』の教えを説く書物の中で六十三段に類似した内容の話が用いられているということに注目したい。言い換えれば、六十三段は、『法華経』の「方便品」に語られたような仏の教えを説くための一つの「方便」とも考えられる。「みやびを」問答にも「方便」の語は用いられていた。

さらに、六十三段以外の『伊勢物語』と『法華経』の関係について、五十八段をとりあげたい。五十八段は、先ほどにも示したように、男の歌にある「落穂」という表現が『法華経』に対しての『涅槃経』を暗示しているとされ、男の隣に住む宮ばらを、男が歌の中で「鬼」に喩えていることは、『法華経』陀羅尼品「十羅刹女」に相当するとし、『法華経』と『涅槃経』により展開する隠された文脈を創り出していると指摘されている(34)。『涅槃経』は、『法華経』と問題意識を共有し、「一切衆生悉有仏性」すなわち「すべての衆生に仏性がある」とする仏典である。また、「心つきて色好みなる男」が「田刈らむ」とすることは、その男が田の主であることを示し「みやびを」問答の大伴田主をも連想させ、男と女どもの和歌の贈答の内容も、「みやびを」問答を連想させる。女たちが男の家に押しかけて来て、男が逃げ隠れ、女たちを老婆ならぬ「鬼」に見立てて「おそのみやびを」のように色好み的な対応をしないということで共通している。五十八段と六十三段は、「みやびを」問答を背景に持つことで共通し、五十八段の「心つきて色好みなる男」は、六十三段の「世ごころづける女」と対比して描かれているのではないだろうか。さらに、二つの段は『法華経』に関連する段ということでも共通している。

終わりに

六十三段の冒頭にある「世ごころ」と「心なさけ」の二語は、そのもとになった漢語「世心」「心情」が仏典に用例の多い語で、特に「世ごころ」については、「世の人の心」と広い意味でとり、仏教的な「煩悩」の意味も含まれていると考えられる。六十三段と一条北の方物語の背景には、『万葉集』の「みやびを」問答があり、そこでは「方便」の語が用いられていた。「方便」は仏教では人々を覚りに導くための手段であるが、「つくも髪」の女や一条北の方の物語では、煩悩による自分の思いを遂げるための手段であった。女郎は「方便」による「自媒」を恥ぢたが、「つくも髪」の女の「恥」は描かれず、一条北の方は「恥」を捨てて千蔭に手紙を贈るが、二人の交際には常に千蔭の「なさけ」による一条北の方の「恥」の回避があった。その「恥」も、漢詩文、特に仏典に由来する言葉であり、千蔭が亡き妻の

遺言を守らず一条北の方に通ったことは、俊蔭が回避しようとした仏教の淫欲の罪に相当する。「在五中将」と千蔭は、仏の「慈悲」にも似た「けぢめ見せぬ心」「なさけ」を持ちながら、仏性は持たされず、仏性を持たされた理想の男主人公としては、『源氏物語』光源氏の登場を待たなければならない。このように、『伊勢物語』六十三段は、『うつほ物語』の一条北の方物語における仏教思想による読みを逆照射することによって、仏教思想の影響に基づいた新たな読みが可能になる。

注

（1）本稿では、橘千蔭の元の北の方と区別するために、亡くなった左大臣の正妻は「一条北の方」と呼称し、一条北の方と橘千蔭の結婚とその後の二人の関係についての物語を「一条北の方物語」として扱っていく。

（2）片桐洋一『伊勢物語全読解』（和泉書院、二〇一三年）

（3）山本登朗「伊勢物語の成熟期――第六十五段とその周辺――」（『伊勢物語の生成と展開』笠間書院、二〇一七年）

（4）注（2）に同じ。

（5）今井源衛「伊勢物語六三段と漢文学」（『今井源衛著作集七』笠間書院、二〇〇四年）の六つのモチーフにBとGを新たに加えた。

（6）竹岡正夫『伊勢物語全評釈』（右文書院、一九八七年）

（7）『伊勢物語』（講談社文庫、一九七二年）

（8）大野晋『日本語の世界』（朝日新聞社、一九七六年）

（9）犬塚旦「『なさけ』について」（『王朝美的語詞の研究』笠間書院、一九七三年）

（10）竹岡正夫『古今和歌集全評釈』（右文書院、一九七六年）

（11）藤原克己「漢語の「情」と和語の「なさけ」と」（『ことばが拓く古代文学史』笠間書院、一九九九年）

（12）『雑阿含経』と『賢愚経』はSAT大正新脩大蔵経データベース（以下、二〇一八を利用）からの本文である。『藝文類聚』は上海古籍出版社の一九九九年発行のもの。『白氏文集』の本文は新釈漢文大系による。

（13）SAT大正新脩大蔵経テキストデータベースで検索すると、「世心」は五八二件、「心情」は九二件ある。「世心」は、句読点を除いた二字の並びとしての用例が多い。

（14）新釈漢文大系『白氏文集二上』の「心情」の語釈。

（15）宮谷聡美「『伊勢物語』六十三段「つくも髪」の性格」（『東京経営短期大学紀要』第十八巻、二〇一〇年三月）。後藤幸良「『伊勢物語』第六十三段と和漢の文学」（『相模国文』三九号、二〇一二年三月）。大井田晴彦「老いらくの恋―『伊勢物語』第六十三段とその周辺―」（『名古屋大学文学部研究論集（文学）』六〇号、二〇一四年三月）。

（16）新編日本古典文学全集『万葉集①』九八頁頭注によるが、三宅香帆「石上女郎大伴田主贈答歌に見る『遊仙窟』の影響―二人の「風流」をめぐって―」（『人間・環境学』二八巻、二〇一九年十二月）による考察もある。

（17）小島憲之『上代日本文學と中國文學　上』（塙書房、一九六二年）

（18）宮坂宥勝『暮らしのなかの仏教語小辞典』（ちくま学芸文庫、一九九五年）

（19）田主は女郎の変装に気付いていた可能性もあり、その場合、六十三段の男が、自分の家に来た「つくも髪」の女の垣間見に気付く場面にも通じる。

（20）十娘の美貌が語られる際、「資質天生有、風流本性饒（資質のすがたは天生に有り。風流のみやびやかなる本性饒（ゆたか）なり）」で「風流」の文選読みがなされ「みやびやかなる」と読まれている。この本文は、蔵中進編『江戸初期無刊記本』（和泉書院、一九八一年）によるが、本稿では八木沢元『遊仙窟全講増訂版』（明治書院、一九七五年）を用いた。

（21）一条北の方は六十三段の「つくも髪」の女と比較されることが多く、大井田晴彦「一条北の方の造型―『うつほ物語』作中人物覚書―」（『物語研

究会会報』26号、一九九五年八月）では、一条北の方の千蔭を引き寄せる巫女的な力に着目し、柳瀞先「『宇津保物語』における〈老女の恋〉―一条北の方をめぐって―」（『名古屋大学国語国文学』九二号、二〇〇三年七月）では、一条北の方の「好色な嫗」としての造型を「行動する女」として捉えている。

(22) 関根賢司「恥を捨つ」（『〈恥〉の文化史　神話・物語・仏教』おうふう、二〇一四年）

(23) 竹岡正夫『伊勢物語全評釈』（右文書院、一九八七年）

(24) 新井真弓「宇津保物語中の「恥」について」（『国際文化研究紀要（横浜市立大学）』十号、二〇〇四年十二月）

(25) 『涅槃経』はＳＡＴ大正新脩大蔵経データベースからの本文で、「慚愧」を同じデータベースで検索すると、九七七二件の用例がある。『涅槃経』の解釈は、定方晟『大乗経典を読む』（講談社、一九九二年）による。

(26) 石井公成「曖昧好みの源流―『伊勢物語』と仏教―」（『文学』五巻五号、二〇〇四年九月）

(27) 中野方子「『伊勢物語』と仏典―五十八段と『法華経』・『涅槃経』―」（『伊勢物語　虚構の成立』竹林舎、二〇〇八年）

(28) 注（26）と注（27）、上野理・宮谷聡美「伊勢物語と漢文学」（『源氏物語と漢文学』汲古書院、一九九三年）などによる。

(29) 石井公成「『遊仙窟』に始まり仏伝に終る―定家本『伊勢物語』の構成―」（『駒沢大学　佛教文学研究』一一号二〇〇八年三月）

(30) 『仏教経典の世界　総解説』（自由国民社、一九九三年）

(31) 植木雅俊『法華経とは何か　その思想と背景』（中公新書、二〇二〇年）

(32) 注（26）に同じ。

(33) 徳田和夫「九十九髪女と三男三郎」（『日本古典文学会々報』九九号一九八三年一一月）

(34) 注（27）に同じ。

＊『万葉集』『伊勢物語』『うつほ物語』の本文は、新編日本古典文学全集を用いた。表記は、私的に改めたところがある。

＊本稿は、二〇二一年十一月古代文学研究会例会での発表をもとにし、その際ご教示いただきました先生方には感謝申し上げます。